

同窓会活動に対する教員の支援のあり方

Teachers' Support to Activity of Alumni Association

黒田 静江¹ 古川 繁子² 浅川 繭子³

本報告は、『同窓会協力委員会』の活動の今後のあり方について検討することを目的としたものである。平成21年度は新しい試みとしての「介護・保育・職場を語る会」及び、3年ぶりに卒業生へのアンケートを行った。「介護・保育・職場を語る会」は、1、2回目は新卒者を対象とした悩み相談、3、4回目は卒業生を中心に在校生も交えて現場で役立つ実技を行った。語る会の感想やアンケートの結果から、新卒群、中堅群、ベテラン群の年代により求める卒後支援内容に違いがあることが明らかになった。また、卒業生が学びあう場として「職場を語る会」は継続していく必要があると結論を得た。今後は、それぞれの要望にこたえられるような体制を作っていくことが求められる。

キーワード：同窓会、介護職・保育職、卒業生支援、「職場を語る会」

1. はじめに

本学は、平成11年度に設立され、昨年度9回目の卒業生を社会に送り出した。平成19年度までは、同窓会を支援するために、「同窓会係」が教員の公務分掌の中でも設けられていたが、平成20年度からは「同窓会協力委員会」と名称も変わり、教員のメンバーも一新された。

短大同窓生が職場で新人職員である間は、仕事が忙しいため、活発な同窓会役員会はあまり開かれていなかったが、平成21年度には、植草学園として短大・高校・歴代の専門学校を含めた同窓会連合組織を創設する準備などで、同窓会役員の委員会活動は頻度を増した。

平成20年度の後半から平成21年度の「同窓会協力委員会」としての活動方針の検討があり、同窓会総会や同窓生懇親会が大学祭の一日を使ってされていることや、ホームカミングデイのあり方、同窓会役員の活動などについて話題となっていた。同窓会の機能がどのようにして活発化するか、卒業生が母校に対してどのような意識を持っているのか等、課題が挙げられた。そのような話し合いの中から、新卒者の悩み相談を開設する必要性が挙げられ、平成21

年度の活動の一つとして、「介護・保育・職場を語る会」の開催を決めた。

もう一つの課題として、「同窓会協力委員会」のあり方について今後の検討課題とした。平成21年度の「同窓会協力委員会」の活動報告をすることにより、今後のあり方を検討していきたい。

2. 「介護・保育・職場を語る会」

報告1 介護・保育・職場を語る会（4月・5月）

(1) 実施の背景

介護労働安定センターがおこなった全国5,929事業所、18,035名を対象に実施した平成20年度介護労働実態調査によると、離職者のうち、当該事業所に勤務した年数が「1年未満の者」は39.0%、「1年以上3年未満の者」は36.5%で、離職者の75.5%が3年未満となっている。また、文部科学省の平成19年「教員異動調査」の「離職の年齢区分別離職教員数」によると、全国12,857名の幼稚園教諭の離職者のうち、25歳未満が占める割合が、全体の33.7%となっている。本校の卒業時就職率は開学以来97%以上を維持している。しかし、平成18年度に本学で実施した卒業生へのアンケート（330名中46名回収）

でも、転職率は32.6%と約3人に一人が転職しているのが現状である。

また、在校生の就職活動支援の一環として平成17年から開催している「卒業生の話を聞く会」に参加した卒業生の中からは、新卒ならではの悩みも多く寄せられている。

就職後数年で離職することは、本人にとっての大きな問題であるとともに、介護・保育の質の低下を引き起こすことにつながると予想される。そこで、新卒者を対象とした悩み相談の必要性があると考え、「介護・保育・職場を語る会」を実施した。

(2) 実施の概要

働き始めて間もない4月と5月に行った。対象となる新卒者には、卒業前及び卒業式当日にチラシを配布して知らせた。4月に入ってからには葉書にて開催のお知らせを郵送した。

第1回目 平成21年4月25日 13:30～15:00

【参加者】地域介護福祉専攻

5名+1名(平成15年度卒業生)

児童障害福祉専攻

2名+3名(専攻科在学生)

合計11名

第2回目 平成21年5月23日 13:30～15:00

【参加者】地域介護福祉専攻 2名

児童障害福祉専攻

3名+2名(平成19年度卒業生)

合計7名

(3) 参加者の感想

○社会の厳しさ、責任感が重くのしかかり、とても不安です。毎日仕事に行く前は緊張してしまい、食欲がなくなったり、精神的に不安定になったりします。仕事に「行きたくないな」と思うことばかりですが、それが社会人というものなのだと割り切って行きたいです。

そんな中でも、理解してくれる方もいます。一番大切なのは一人でため込まず、思いを吐き出すことだと感じました。この仕事は好きになれないと本当につらい仕事だと思います。苦しくなる前にたくさん頼ること「迷惑をかけたくない」と思

うけど勇気をもって、迷惑をかけることが大切だと感じました。(地域介護福祉専攻卒業生)

○短大生活がとても充実していたので、就職先とのギャップが大きすぎて寂しさ、孤独感がありこれからは不安になった。実習生・研修生・新人職員の違いについていけなくて混同してしまい、大変だった。

職員一人ひとり考え方の違い(一人の利用者さんに対してでも)によって、自分がケア方法をおぼえていない、間違っていると思われると思い悔しくて泣いてしまう時がある。できないことが悔しいけれど、相談する人がいない。(短大の友人は忙しそうだし、仕事の先輩は「○○もできないの?」って思われるのが怖くて言えないし聞けない。)

利用者の「いつも」を知らない(覚えられない)うちにケアするのが怖い。一人の命の重さを些細なケアの瞬間に感じる。急に責任がかかってきて。物事に対する恐怖感がある。

職場に一人でも安心して話せる場所・人を見つけることの大切さを感じる。

(地域介護福祉専攻卒業生)

○みんな忙しくてつらいということがわかった。もっと人が増えて話を聞きたい。

(地域介護福祉専攻卒業生)

○まだわからないことだらけでとても迷惑をかけてしまっています。毎日帰るととても疲れてしまい、ペープサートなどなかなか作る時間がないです。

(児童障害福祉専攻卒業生)

○新設でわからないことだらけで職員も子ども達も落ち着かず毎日ドタバタだったんですが、5月に入ってだいぶ落ち着いて仕事にも慣れてきました。先生方は皆さんとてもやさしいので働きやすい職場です。毎日がとっても充実しています。いろいろ話せてよかったです!!

(児童障害福祉専攻卒業生)

(4) 考察

参加者からの感想には、新卒者の不安などが反映されていることがわかる。専門職に対する知識や経験の浅さから生まれる恐怖感と、周囲の先輩達からどう見られているのか、迷惑をかけているのではないかという職場の人間関係に関することが負担となっていることが読み取れる。これらのことは、望月ら（2001）による、関東地方にある保育者養成校卒業生に対する職場適応に関する調査で明らかになっていることと重なる。望月ら（2001）によると、保育・教育関係の職に従事している者のうち、職場において「イヤだ」「困った」と感じることで最も多いのは、「職場での人間関係」となっている。そのうち、ベテラン群と新人群に分けて比較すると、ベテラン群に職場での人間関係の困難さを指摘する割合が高くなっている。一方新人群は、職場での人間関係の割合も高いものの、日々臨機応変な対応をせまられる「保育活動そのもの」に対して困難を感じているものがみられたという。

また、「介護・保育・職場を語る会」で語られた内容は、たとえば、訪問介護支援センターに配属された一人は、2週間は他の職員と2人で訪問していたが、それからは一人訪問となった。また、就職して3か月未満でも夜勤業務が入っているという話もあった。介護の現場は、新人教育を整える余裕が以前ほどなくなってきたのではないかと感じる。

一方、幼稚園の現場では、新人でも30名以上のクラスを一人で担任するのが主流である。子どもたち、保護者の担任保育者に対する要求は、基本的にはベテラン保育者に対しても1年目の保育者に対しても変わらないものである。新人に対する負荷は高いと思われる。

各職場で良好な新人教育が得られることが一番であるが、その余裕が少なくなってきたのが現状だとすれば、養成校としてサポートできることはやっていく必要があると思われる。今回の2回の「介護・保育・職場を語る会」の実施から、①人間関係のサポートとしての語り合う場という役割とともに、②専門的スキルのサポートについても実施していく必要が示唆された。本来各職場で力を入れるべき新人教育ではあるが、養成校の同窓会という組織の中で職場の枠を超えて先輩から後輩へさまざまな

知識や経験を伝える場があることは意義深いと思われる。

報告2 介護・保育・職場を語る会（10月・12月）

(1) 実施の背景

新卒者対象の4月・5月の「介護・保育・職場を語る会」（以後、職場を語る会と記す）に出席した卒業生から、手あそびやわらべうたをもっと知りたいという意見が出された。手あそび歌やわらべうたを使って、人と関わりながら歌ったり動いたりすると、明るい気持ちや前向きな気持ちになったりして、満足感を味わうことができる。それは、保育現場だけではなく、高齢者の援助を行う場においても取り上げたい活動でもある。保育や介護福祉の現場にいる経験豊富な卒業生が発表し合う「職場を語る会」を実施し、介護や保育現場にいる卒業生同士が、教えあい学びあう場をつくる。卒業生自身が教えあったり、他の専攻の卒業生との交流をもつことで、ストレスを発散したり、仕事に向かう意欲を育てたい。在校生にも参加を呼びかけ、現役の先輩から手あそび歌・わらべうたやクリスマスグッズを教えてもらうことで、言葉のかけ方や、教え方のコツなどについて直接学ぶ機会とする。

(2) 実施の概要

第3回 介護・保育・職場を語る会

「手軽に手あそび・わらべうた」

【日程】平成21年10月24日（土）13：30～15：30

1部 附属幼稚園で使われているあそび歌・わらべうた

2部 介護の現場における音楽活動について

【具体的内容】

1部：現役の卒業生が、幼稚園で使われているあそび歌やわらべうたについて、指導した時の子どものように、子どもたちと考えたバリエーションなどの話を交えながら、卒業生がリーダーとなって皆で行った。最後の方の活動では、新聞紙をちぎった後で、元通りの一枚の形にしたり、グループで競争したりしながら一直線に並べるなど、初対面の人とも協力しながらゲームを行った。

2部：最初に高齢者を対象としたレクリエーション活動で使われている、動きを伴った歌の扱い方についての説明があった。介護で手あそびやわらべうたを使う時は、必ず目的があって活動をする。例えば、歌ったり動いたりすることが、どのような機能訓練に役立つのかとか、日常生活の質の向上や老化防止にどのように役立つのかなどを考え、運動量なども考慮して活動を行っている。手あそびなどを行う時は、まず利用者の方が全身で楽しいことをしていると、感じてもらえるような、メッセージを送り続けることが大事である等の説明の後に、「ドレミの歌」や「しあわせなら手をたたこう」など、動きを入れながら歌った。

【参加者】 32名

卒業生 9名	植草幼児教育専門学校 8名 (子ども 2名)
	地域介護福祉専攻 1名
在校生 23名	児童障害福祉専攻 1年生 8名・2年生 5名 地域介護福祉専攻 1年生 7名 発達教育学部 2年生 3名

第4回 介護・保育・職場を語る会

「クリスマスイベント・グッズで遊ぼう」

【日程】 平成21年12月5日(土) 13:30～15:30

1部：保育現場で使われているエプロンシアターやパネルシアターを見たり、クリスマスにちなんだ折り紙や歌(手話ソング)を楽しむ。

2部：高齢者も楽しめるクリスマス イベントを楽しむ。

【具体的内容】

1部：最初はパネルシアター「森のクリスマス」で、ユーモラスなサンタクロース兄弟の話(ミュージカル仕立て)を、CDのカラオケに合わせ歌いながら、演じるのを見た。次はエプロンシアター「サンタさんはどこ?」で、いくつかあるポケットから、サンタの赤い帽子のような物が見える。歌と語りで進行しながら、参加者にサンタさんはどこにいるかを当ててもらった。折り紙の製作では、キャンドルとベルを作った。最後は手話ソングを習い皆で

「赤鼻のトナカイ」を歌った。実際の保育の場で行えるような、細やかな配慮が行き届いていた。

2部：「ペットボトルでクリスマス ボウリング」

専攻科(介護福祉専攻)学生の発表

いろいろな色水を入れ、クリスマスグッズを貼ったペットボトルに、ボールを当てるゲームをグループで行った。

「高齢者を対象としたクリスマス会」

初めに、新聞紙で作ったカラーボールを、模造紙に描かれたツリーに投げて貼り付けるというゲームを行った。次に、全員が輪になり、キャンドルを持ってクリスマスソングを歌っていると、サンタクロースが一人ずつ点火して回った。ゲームを行った後で、高齢者対象の場合、投げるという動作は肩関節の拘縮予防につながることや、歌うことは、喉の発声器官を鍛えることにつながるなどの説明があった。また介護福祉の現場でのイベントにおいても、常に体力維持や体力向上を目的として行われる。認知症や半身不随などの障害がある方には、今回のようなイベントをすることはできないので、ダンスや音楽演奏を見て楽しんでもらえるようなクリスマス会を行っており、人の前で踊ったり歌ったり演じたりすることもあるという。

【参加者数】 27名

卒業生 5名	植草幼児教育専門学校 3名
	地域介護福祉専攻 1名
	専攻科(特別支援) 1名
在校生 22名	児童障害福祉専攻 2年生 4名
	地域介護福祉専攻 1年生 2名
	専攻科(介護福祉専攻) 6名
	発達教育学部 2年生 10名

(3) 10月・12月の「職場を語る会」についての考察

①卒業生の感想

当日発表した卒業生は、アンケートの中で、「私自身の気分転換となり良かった」や「自分自身の気分転換になった」とか、「若い人たちと一緒に新鮮な気持ちで参加できた」など書いていた。これは、発表を通して、日ごろの保育活動とは違った楽しさを、受講者と共有できたからではないかと思われる。また保育歴が長いベテランの保育

者は、「ちがう学科の学生に教えてみて、自分の視野が狭いことに気付いた」という感想を述べていたが、これは、学科や専攻の違いだけではなく、対象者の年齢層（小学生～50代）も幅が広がったので、学生の学びへの姿勢や動きを見て感じたことであろう。自分を見つめたり、他者を受け止めながら何かに気付けることは、保育の幅を広げるうえでも大切な経験であると思う。

②学生の感想

参加した学生は、介護福祉士養成では地域介護福祉専攻と専攻科（介護福祉専攻）と保育者養成では、児童障害福祉専攻と大学の発達教育学部の学生たちであった。感想は、大筋では、「楽しかった」「勉強になった」という内容がほとんどであったが、当然のことながら受け止め方は違っていた。

介護福祉士養成の学生（1年生）の感想から、印象深いものを3つ取り上げる。「技術を交換し合える場にもっと参加したい」という感想があった。今回行われたような音楽を使って、人と楽しく関われるような活動が展開できる介護福祉士になりたいと思っただけのことと思う。また「今後のことを考えた時、自分に欠けているものに気付かせてもらった」と書いている学生がいた。講座に参加し自己の姿を省みて、新たな成長へのきっかけをもらったのであろう。また他には、「初めは、積極的になれなかったが、一生懸命にやっている先輩の先生を見て“照れている自分”が恥ずかしくなった」と書いている学生がいた。これは、本人も心を動かされ、友だちとともに楽しめたからではないかと思う。介護福祉士も人と関わる仕事なので、他者と共感できることは大切なことであり、授業の中では体験できないことを学べた結果だと考える。

一方、保育者養成の学生は、「導入・言葉かけ・声の出し方など、とても参考になった」「指導の際の留意点がわかりやすかった」「エプロンシアターのやり方を学べた」などと大変具体的な感想が多かった。また「実際に現場に立って、実習でも活かしていきたい」という意欲的なものもいくつかあった。「在学生とOB, OGの方とも交流できて勉強になったので、来て良かった」とか、「専攻が児童なので介護についての話を聞くことがで

きて、いい経験になった」という学びの多様性や相互性についての感想もあった。これも本学ならではの良さを、参加した学生も感じていたことと思う。

反省点としては、発表後に卒業生同士が語りあう時間が取れなかったことである。発表が予定より長引いたこと、発表者が、お互いに仲間同士であったことも原因である。卒業生がもっと大勢参加していたら、卒業生同士が語りあうグループワークができたと思う。これは、卒業生へのアピールの仕方も含め今後の課題である。

3. 卒業生へのアンケートとその結果について

(1) 実施の背景

過去において、何回か卒業生にアンケートを実施したことはあるが、前回のアンケートを取ってから4年が経過したので、「キャリア向上に関するアンケート」を実施した。

(2) 実施の概要

1,642名の卒業生に対して、同窓会会報と共にアンケートを同封し、平成21年8月下旬に送付した。また同窓会総会の出席の有無の回答を返信する時、一緒にアンケート用紙を送り返してもらうようにした。

回答数 児童障害福祉専攻 58名

地域介護福祉専攻 37名

合計 95名（回答率5.8%）

(3) アンケート結果

キャリア向上に関するアンケート結果の中から、「職場を語る会」に関係する部分として、設問「今必要だと思われるリカレント教育（卒業後の生涯教育）の内容を教えてください。（複数回答可）」に関する集計結果を、分析し報告する。なお、設問に対する回答としての選択肢は次の通りである。

- A 人間理解に関すること
- B 制度・社会の仕組みに関すること
- C 保育や介護の原理やスキルに関すること
- D その他仕事をする上で必要な知識や技術に関すること
- E 仕事を再開するために必要な情報やスキルに関すること
- F その他

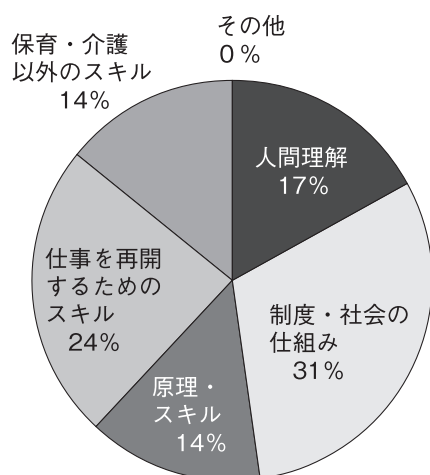


図 1. 地域介護福祉専攻 23歳まで

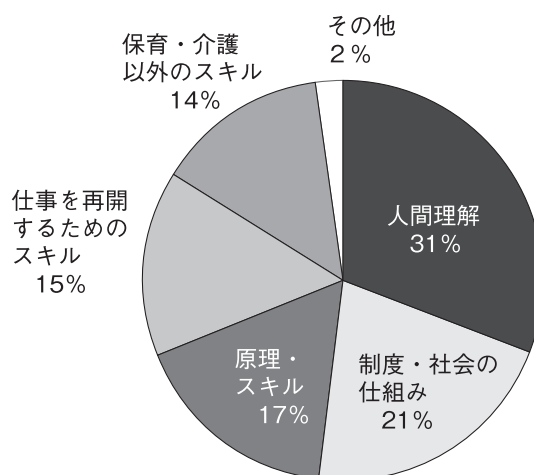


図 4. 児童障害福祉専攻 23歳まで

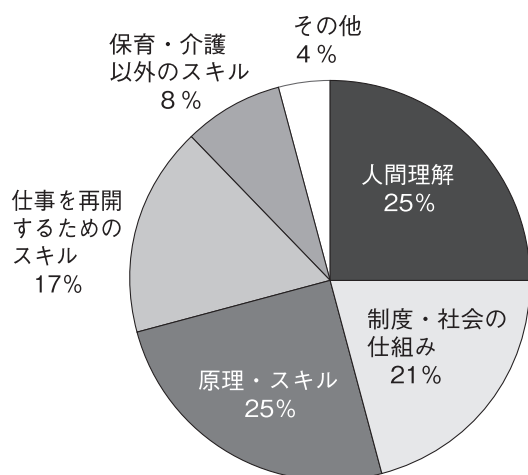


図 2. 地域介護福祉専攻 24～26歳

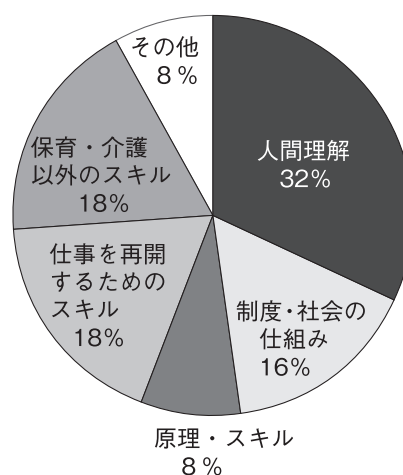


図 5. 児童障害福祉専攻 24～26歳

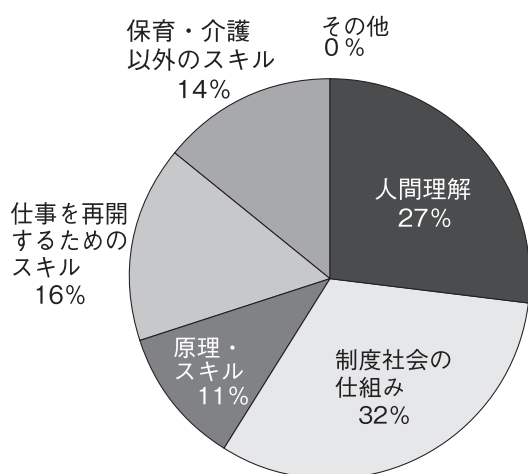


図 3. 地域介護福祉専攻 27歳以上

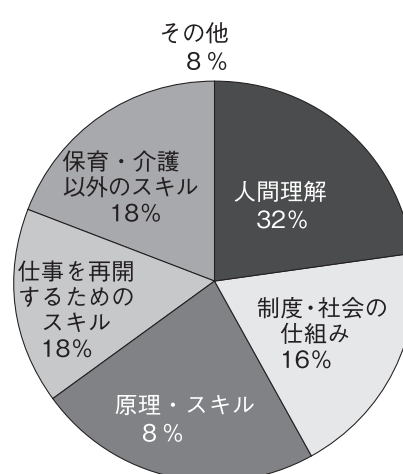


図 6. 児童障害福祉専攻 27歳以上

(4) アンケートについての考察

分析にあたり、各専攻ごとに年齢によって新人群 (23歳まで)、中堅群 (24歳～26歳まで)、ベテラン群 (27歳以上) と3つのグループに分けて分類した。

①各項目への回答数は、両専攻とも一人あたり2.5であったが、中でも「図6 児童障害福祉専攻」(以後「図6 児童」と記す)の群が、一番回答数が多くて、2.9であった。

②人間理解

アンケート結果では、「図1 地域介護福祉専攻」(以後「図1 地域」と記す)を除いたすべての群で、25%以上の人が、卒業後の教育内容として、「人間理解」に関することを希望していることが分かった。特に「図4 児童」と「図5 児童」では30%以上の人が回答していた。専門職として、人に関わることが仕事なので、このような結果が表れたのであろう。

この項目の中に含まれる人間理解としては、職場での人間関係をはじめ保護者や利用者との人間関係のつくり方や、支援を必要としている家族への対応などがある。また発達に関することとして、乳児保育をはじめ集団の中での行動がとりにくい子ども・障害のある子どもの保育などのほかに、高齢者の身体的、精神的及び知的な面など総合的理解が含まれるが、もっと細かく項目を分ける必要があった。

③制度・社会の仕組み

「図1 地域」「図3 地域」では30数パーセントの回答があり、次いで「図2 地域」と「図4 児童」でも21%と高い回答率であった。これは、平成18年度より介護保険法の改正が行われたことや、保育所保育指針や幼稚園教育要領が改訂され、今年度より施行されたことなどが、背景にあると考えられる。従って法律の改正・改訂などがあった場合は、リカレント教育を行う必要があるだろう。

④原理・スキル

「図5 児童」だけは、8%であったが、「図2 地域」「図6 児童」はともに24%前後であった。この項目の中には、原理・スキルとして、福祉原理や保育原理などの内容のほかに、介護技術・ICFや保育内容実技が含まれる。児童障害福祉専

攻の「ベテラン群」が高いのは、職場でも指導的立場になってくことや、保護者への対応などで説明責任が生じ、改めて原理やスキルを、学び直したいと思っているのではないかと推察できる。

⑤仕事を再開するためのスキル

各群ともに15%～18%であったが、「図1 地域」だけは特に数値が高く、24%であった。これは、卒業後3年未満の人は、再就職を希望している人が多いということであろうか。

4. まとめ

今回実施した「介護・保育・職場を語る会」参加者の感想やアンケートの集計結果から、新卒群、中堅群、ベテラン群の年代による卒後支援内容の違いが考察された。今後、各ニーズに沿った支援が行えるかが、課題として浮かび上がってきた。

介護労働安定センターがおこなった調査(平成20年度介護労働実態調査)によると、離職者のうち、勤務年数が「1年未満の者」は39.0%、「1年以上3年未満の者」は36.5%で、離職者の75.5%が3年未満となっている。本学のアンケートにおいても、「仕事を再開するためのスキル」に対して、地域介護専攻の23歳未満の群で回答率が高かったのは、介護労働安定センターの調査結果とも一致している。

社会人1年目は、誰でもさまざまな波を乗り越えていかなければならない。

大学の呼びかけた日に参加できなくても、「職場を語る会」の案内状を手にしたことで、後日個々に大学に来て近況報告をしたり、仕事上の相談をしたりする卒業生の姿も見られた。1年目の大変さは、自分一人が抱えていることではないことを感じたり、話を聞いてもらうことで、ストレスを軽減できる機会として、また卒業生が学びあう場として「職場を語る会」は継続していく必要があると結論を得た。例えば、開催日の前後一週間は、卒業生が自由に学校訪問しても教員が対応できる体制を作るなど、開催方法や卒業生へのアピール方法については、一層検討していきたい。

<文献>

- 1) 古川繁子・山田純子・今井訓子(2009).「新卒者対応相談会」での課題から考える卒後教育. 介護教育学会発表要旨集.
- 2) 望月珠美・石上知美・徳田克己・横山範子(2001). 保育者養成校の卒業生における職場適応Ⅱ: 保育従事

者の職場における楽しみと困難を中心に: 2000年の調査結果より. 日本保育学会大会研究論文集. pp. 808-809.

- 3) 文部科学省. 平成19年度学校教員統計調査
- 4) 財団法人 介護労働安定センター. 平成20年度介護労働実態調査結果について